

## バチエレ大統領誕生と「日本の選択」

細野昭雄（在エルサルバドル大使）

チリ国民は、決選投票の末、バチエレ候補を大統領として選択した。バチエレ大統領は男女同数からなる閣僚を任命しただけでなく、就任の翌日には、60歳以上の高齢者医療を無料にすることを発表し、100日で40件近くもの改革を矢継ぎ早に実施することを表明している。なかでも国民の最大の関心事である医療改革と年金改革にどれだけ本格的に取り組むかが注目されている。こうしてバチエレ大統領ならではの速やかな改革を意欲的に進めているが、こうした今日の状況を15年前の民政移行時に誰が予想し得たであろうか。

バチエレ政権の「新たな実験」の行く末を、ラテンアメリカはもとより、広く多くの途上国が強い関心を持って見ている。民政移行後の3代の政権は、経済改革の成果、特に経済の安定化、自由化、民営化、多数の国とのFTA締結による輸出の拡大などについてしっかり継承しつつも、貧困対策をはじめ多くの社会改革に取り組んできた。特にバチエレ大統領の前任者であるラゴス大統領の努力の成果は顕著であり、その成功は特筆に値する。それはラゴス大統領への国民の支持が就任時より退任時により高く、70%にも達したことに反映している。

こうしたチリの経済・社会両面での成功を最も強い関心を持って見ている国のひとつが私の在任するエルサルバドルである。エルサルバドルとチリの友好関係は、カルロス・イバニェス・デ・カンボ大統領の時代にまで遡るが、内戦末期の1980年代末以来、エルサルバドルはチリのエコノミストの助言を得つつ、チリ型経済改革を本格的に導入した。その結果、経済的に安定し、今やチリ（およびメキシコ）につぐマクロ経済の健全な国と見なされるに至っている。そのエルサルバドルにおいて2004年大統領選でサカ政権が誕生し、社会政策重視の方向を明らかにした。大統領就任の日の午後、エルサルバドルを訪問したラゴス大統領は、同国官民のリーダーを前に記念すべき講演を行った。経済の健全性を維持しつつ、ラゴス政権に至る民政下の歴代政権が実施してきた貧困対策・社会政策の経験がその中心的内容であった。サカ政権は早速、貧困マップの作成、チレ・ソリダリアに似たレッド・ソリダリア（直訳すれば「連帯のネットワーク」）を含む一連の政策を実施に移した。エルサルバドルほどではなくとも、チリの経済・社会政策ないし、チリ・モデルのラテンアメリカ各国における間接的・直接的影響はかなり大きいものと考えられるが、新たな理想をもって、意欲的に取り組むバチエレ政権の誕生により、それはますます強まるであろう。

こうしてチリの経済・社会モデルは、ラテンアメリカの多くの諸国の関心を一層集めるであろう。本誌の「チリ特集」は「チリ・モデル」に関する貴重な文献となろう。それはまた、わが国自身の将来を考える際にも参考になるのではないだろうか。

チリの改革の多くは、ユニークな制度的革新を含むものであった。日本・チリ修交100周年を記念して、ネオ・リベラル改革の推進者であった元蔵相エルナン・ピュッチ氏と、それとは意見を異にするカルロス・オミナミ上院議員を東京にお招きしてセミナー（100周年実行委員会主催）を行い、そのときの議論をもとに、松下洋教授らと『チリの選択・日本の選択』という本を編集・刊行（毎日新聞社刊）したが、当時はまだチリの経験が「日本の選択」にも参考になるのではないかというような私どもの考え方を支持する方々は、ごく少数であったと思われる。それから10年、修交110年を迎えようとしている今日、バチエレ政権が誕生した。マチスモ（男性中心）社会のラテンアメリカで、女性の政治・行政への参加を格段に引き上げようとする彼女の政策は、わが国のメディアでも広く取り上げられたが、それはバチエレ大統領の政策のごく一部にすぎない。本号における「チリ特集」は、この新しいバチエレ政権のチリを知るためだけでなく、「日本の選択」を考えるためにも必ずや貢献するであろうと考える。